普陀山

普済寺・法雨禅寺・柴竹林禅寺・梅福庵・慧済禅寺・不肯去観音院・潮音堂・梵音堂・南海観音･観音洞禅寺・西方禅院

当地が観音霊場となった由来は、916 年、中国への渡来僧である慧萼が、中国留学を終えて日本に帰国しようとした際、日本に将来しようとした観音菩薩が当地で日本に渡ること拒んだ（＝不肯去)、という故事にちなんでいる。よって、その観音菩薩は「不肯去観音」と称されており、そのお堂は「不肯去観音院」と呼ばれる。以後、この舟山群島中の普陀山は、観音菩薩の浄土である**補陀落**（ふだらく）に擬せられ、人々の信仰を集める中国有数の霊場となった。「普陀山」という名称の由来も、「補陀落」である。日本僧”慧鍔（えがく)”が建てた寺。慧鍔が五台山から拝領した観音像を抱いて明州(今の寧波)から船で帰国しようとした。一回目は濃い霧に阻まれて帰国できず、二回目は嵐のために、三回目は普陀山にさしかかると、とつぜん海面に鉄の蓮華が湧きだし、船が通れなくなってしまった。皆が恐れてひざまずき「尊像を海東（日本）に持って行くには機縁はまだ熟していないということでしたら、どうぞこの山にとどまりください」といのると、船はすぐに動けるようになったという。慧萼は、さっそく観音像を普陀山の岸に上げ、お堂を造って祀った。これが「不肯去観音院」（行かず観音院の意)の言われです。その後、普陀山は観音道場となり、多くの仏寺が建立されるようになった。**日本の各地の観音菩薩の模像が数多く安置されています。**

普済寺時の前の広い池

池には石造りの橋

池には蓮、春には花盛りでしょう

皇帝が参拝するときに通る参道の入口

皇帝の通る参道の橋

皇帝(乾隆帝)の書いた碑文。

普済寺までの参道

立派な山号額

多宝塔

普済寺（ふざいじ）は前寺とも呼ばれている。霊鷲峰の麓にあって観音大士を祭る普陀山三大寺の主刹である。この

寺が築かれたのは約900年前、七つの殿閣を持ち、瑠璃瓦に黄色い壁で、建物の総面積は1万1400平方メートルあり、宏大で荘厳、非凡の雰囲気を持つ。寺の中央にある円通宝殿は観音菩薩正殿で、高さ8．8メートルの観音菩薩像を祭り、その周囲に観音の三十二応化身をめぐらしている。菩薩像は線香の香り漂う中、心なし顔をうつむけて端座していられる。また建物の高さは約20メートル、幅約46メートル、奥行き約26メートルの木造建築であり、千人余を収容ができる。寺内の殿堂、僧房などはあわせて二百余間、それが整然とした配置で並んでいる。その亭台楼閣、池沼牌坊はまた見事なものである。あの有名な蓮花池は楠の大木に囲まれて大殿の外にある。又**観世音菩薩応化処といわれ、その前身は日本僧の慧萼が建立し、普陀山の開山となった「不肯去観音院」です。大圓通殿の「圓通」は観音菩薩の別号で、観音菩薩を祀り、殿内は千人も収容できるため「活大殿」と称されています。中央には黄金毘盧観音結跏趺坐像があり、周囲には三十三身の応化身仏像が、東西両壁には十八羅漢像、その背面には千手観音を祀っています。**

山門

山門には立派な山号額

広い境内

黄色い屋根の大圓通殿

豪華な山号額

立派なご厨子に観音菩薩

黄金毘盧観音結跏趺坐像

千手観音

文殊殿

普門殿　　広い境内に至る所に香炉　　寒椿に蠟梅

法雨禅寺　法雨禅寺は後寺ともいう普陀山第二の大寺である。581 年明の僧真融が蛾眉山から来て、このあたりの雰囲気に魅せられ寺を建立したのが始まりといわれ白華頂の左側にあって、山を背に積み重なるように建っている。 明の萬暦8年（1580）僧真融が蛾眉山から来て、このあたりの雰囲気にひかれ、茅屋を結び海潮庵と称した。以来寺名来歴の変遷の後1699年、「天花法雨」の額を賜るによって『法雨禅寺』と称し今に至る。寺内の建物は天王殿、玉仏殿、円通殿、大雄宝殿、蔵経楼、印光法師記念堂などで、このほか鐘楼と鼓楼がある。円通殿は九竜殿とも呼ばれる。南京にあった明の故宮から運んできた建物で、きらびやかな外観、広く巧みな内部構造をもっている。屋根の中心部はドーム形で、そこに大きな珠が一つぶら下がり、周囲を九匹の竜が首をあげ、牙と爪をむいて今にも珠を奪いあおうとしている巧みな構図になっている。この寺の後にある石段は仏頂山の第三の大寺・慧済寺に通じている。

山門

入り口には大勢の観光客

山門の前には広い境内に九竜壁

5 の爪の龍が 9 匹の石造九竜壁

大雄宝殿

大雄宝殿山号額

何故か布袋さん

観音様のご厨子の回りには龍の金の彫り物

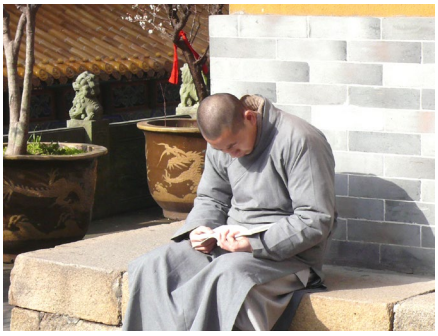
白玉仏

広い境内には線香の煙が漂っています　本堂の前には大きな香炉　大きな伽藍

大きな魚梆（ぎょほう）

開版(かいばん)

風袋



修行中の僧侶、ただいま勉強中

鐘楼

鼓楼

梅福庵は梅嶺にあって、梅嶺庵とも呼ばれる。梅福とは紀元前33年～頃宮仕えを嫌い、家族と別れて普陀山に来て、修行し、また村人の病気治療にあたりこの地で世を去った。村人は梅福を偲び庵を造り、その名をとって山の名を梅嶺とし、庵も梅福庵と名付けた。

山門

境内

豪華な御厨子にガラスケース内の三世仏

ご本尊のサイドには羅漢達

慧済寺（えさいじ）仏頂山寺とも言う。山に登れば千里を一望することができる。古くは、慧済庵と言われていたが、１７９３年に円通、玉皇のニ殿および大慈楼、斎楼などの建築が始まり、その後１９０７年、僧徳化が大蔵経を得て、また僧文質が殿堂建立し、ついに大寺院となって、普済禅寺、法雨禅寺とあわせ普陀三大寺と呼ばれるようになりました。伽藍は天王殿、大雄宝殿、観音殿、大悲殿、蔵経楼、鐘楼等が不規則に建っています。大雄宝殿には釈迦牟尼仏、阿難、迦葉、二十諸天、千手観音等が祀られています。

「佛頂頂佛」の文字。左右どちらから読んでも同じ。意味は”佛の霊感は高い所に存在する従って仏頂山の頂上にある慧済禅寺はその象徴である。”と言うようなこと

山門

左右どちらから読んでも同じ

大勢の観光客

広い境内には大勢の観光客

大雄宝殿

黄色い屋根の大きな伽藍

大雄宝殿内には観音菩薩

大雄宝殿内には四天王

大勢の観光客

不肯去観音院は「行かず観音」と言う意味である。日本の僧慧鍔は五台山で観音像を入手（858年）、今の寧波から船で帰国しようとした。途中、普陀山にさしかかると白波立てて海面に鉄の蓮が何百と湧き出し、船が通れなくなってしまった。船長はじめ全員が恐れおののき、「観音像が海を東する機縁はまだ熟していないということでしたら、どうぞこの山にお留まり下さい」と祈ると、船はすぐに動けるようになった。慧鍔は早速観音像を抱いてこの岸に上がった。この地に住む張氏はこの成り行きを見て大変感激し、自分の家を提供し、そこに尊像を祭りたいと申し出た。こうして普陀山は観音道場となり、仏寺が建立されるようになったのである。普陀山最初の寺院が不肯去観音院である。　その後、宋の太祖はじめ各代の皇帝が寺院建立の擁護寄進が続き、普陀山は中国の仏教聖地の一つになった。不肯去観音院に柴竹林禅寺が有る、柴竹林禅寺は明末の建立で、原名は聴潮庵、海に向くこの禅院は観音菩薩が修行したところとも言い伝えられている。紫竹林禅院の傍らにはきれいな石橋と望海亭があって、禅院の大きな建物と引き立てあい、普陀山東南の隅の独特な風景を形づくっている。道中には、珍しい紫竹林がある。

道中に紫竹林、竹の軸が紫色している

山門には不肯去観音院の山号額

柴竹林禅寺の大雄宝殿

観音菩薩三尊像

観音菩薩像

白玉仏

潮音堂　不肯去観音院の足下にあり、高さは約20メートル、洞内は岩が複雑に重なりあい、天窓と呼ばれる空に抜ける穴がある。海水が日夜の別なく洞内に流れ込み、その度に驚くほど大きな音を響かせる。まるで虎が龍が吼えているような轟音である。中に入ることはできず、天窓の所から覗くようになっている。崖の前に梵台があり、台の下が崖で、そこに深い割れ目がある。海水が流れ込むと轟音を響かせ、一面に飛沫が上がる。実に豪快なものである。心静かに洞内を凝視していると観音菩薩の姿がしばしば目の前に現れると言われている。

不肯去観音院に通じる参道

潮音堂

潮音堂に流れ込む波

梵音洞

梵音洞の岩窟

潮音堂から見た海岸

大きな南無阿弥陀仏の石碑

南無大悲菩薩菩薩訶藍と書かれています

南海観　音普陀山を象徴する新作の観音像。1997 年からはじめて 1998 年に完成。高さ 33 メートル。普陀山の南の海に面している。この台から南方の海を見渡す風景は絶好です。

大きな観音像

何処から見ても立派です

広大な面積見事な石門

見事な彫り物石門

石壁にも心配りの彫り物

見事な石塔

観音像の前には四天王

見事な四天王

夕日に輝く四天王

大きな香炉

香炉の台には見事な龍が・・

龍を触ると幸運が・・・

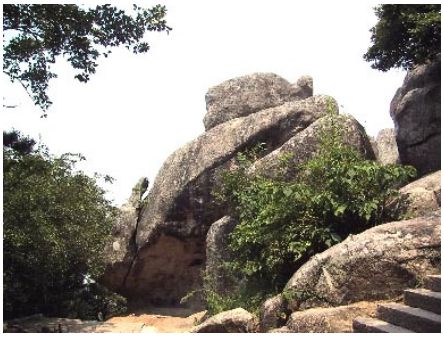
観音洞禅寺は梅嶺峰の西山頂に、上中下の三段階に観音古洞を取り囲むように建つ。創建は明の萬暦年間。現有総建築面積は2580平方メートルで実に広大なもの。西方禅院は観音跳の上方に建てられており、創建は清朝末期で、現在の堂宇は1991年に建て替えられたもの。慧鍔記念堂もこの禅院の一角にある。

観音洞庵

洞窟内が本堂になっている。

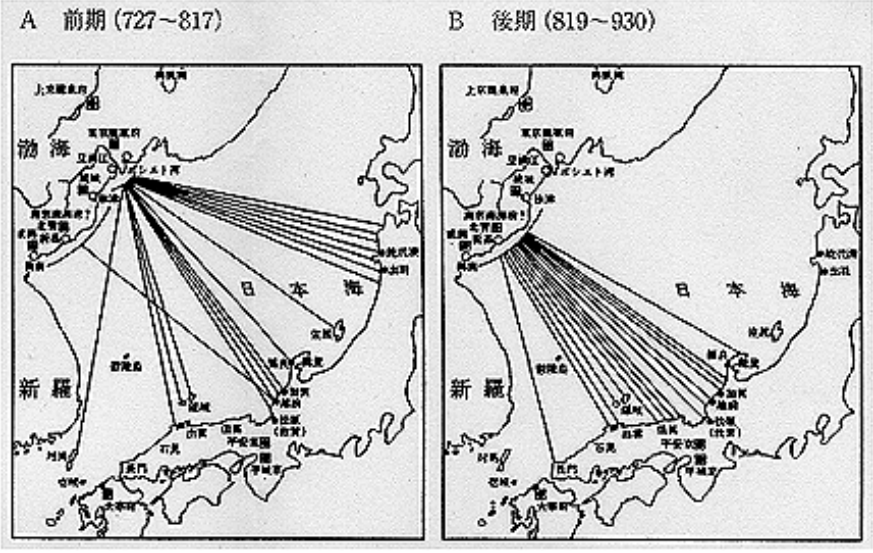
心字石。

磐陀石（観音大師が初めて説法した所）



二亀嘶法石

観音説法台



遣唐船の帰国路

パーラ式仏像